

広島文化学園大学大学院報 (No. 4)

社会情報研究科

博士學位論文

論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

第4号

平成31年(2019年)2月

広島文化学園大学

広島文化学園大学大学院報 (No. 4)

社会情報研究科

論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨 第4号

(平成31年(2019年)2月)

本学は、学位規則(昭和28年4月1日、文部省発令第9号)に基づく広島文化学園大学学位規定により、次のとおり学位を授与した。その論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨をインターネットおよび印刷公表します。(平成30年9月19日に授与した1件を掲載。)

博士の専攻分野の名称	氏名	論文題目	頁
(平成30年9月19日) 博士(学術)	張 静	子ども・青年期の若者・高齢者の地域協働への係わりに関する研究 ー子ども・青年期の若者の景観まちづくり参画と高齢者の社会参加を事例としてー	1

氏 名 (本 籍)	張 静 (中国)
博士の専攻分野の名称	博士 (学術)
学 位 記 番 号	甲第 4 号
学 位 授 与 年 月 日	平成 30 年 (2018 年) 9 月 19 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規程第 2 条該当
論 文 題 目	子ども・青年期の若者・高齢者の地域協働への係わりに関する研究 —子ども・青年期の若者の景観まちづくり参画と高齢者の社会参加を事例として—
論 文 審 査 担 当 者	(主査) 教授 今田寛典 " 松尾俊彦 " 新野正晶 " 東條武治 " 廣瀬 肇 " 高井広行 (近畿大学名誉教授)

論文の内容及び論文審査の結果の要旨

論文内容の要旨

1. 問題意識と目的

本論文は、地域協働の担い手でもある、特に子ども・青年期の若者・高齢者が地域協働にどのように係わるかについて研究するものである。

少子超高齢化、人口減少が急激に進展している地方においては地域協働に期待する部分はますます大きくなってきている。こういった地域事情の中で子ども・青年期の若者・高齢者はどのような立ち位置を考えればよいのか。

現在、地域協働はまちづくりに不可欠なものとして捉えられている。行政だけでは、また地域住民だけでは解決できない地域課題について、相互が協力して解決に向けて活動する。特に、人口減少が進み、少子超高齢社会となった今日、地域内互助、協働が求められており、多様なニーズに対するサービスの向上、公共の支出負担や地域居住者の幸福感も大きく変わってきた。これからの地域社会を考えていく際、地域住民間の信頼関係や互酬性の規範の共有といったソーシャル・キャピタルの高さが問われる。地域住民のソーシャル・キャピタルをどう醸成し、高めていくかが重要である。自分たちの地域に対して愛着

と自信をもつことが、その実践の第一歩である。先人が築き上げてきた地域、それを引き継ぎ、発展させていくことは、われわれ世代に与えられた責務でもあり、その教えそのものを基本的な教育として、次世代に引き継ぐよう実践していく必要がある。このためにも引き継いでくれる子どもと青年期の若者、そして多くの知識や経験を持った高齢者の共同への参加・参画が求められる。

以上のような観点から本論文は、子ども・青年期の若者の景観まちづくり参画、高齢者の社会参加を事例として地域協働の現状と課題、そして課題の解決について研究することを目的としている。

2. 本論文の構成

本論文の構成は以下の通りである。

序編

第1章 子ども・青年期の若者・高齢者が地域協働に係れるか

第I編 子ども・青年期の若者の景観まちづくりへの参加・参画

第1章 子どもの都市景観認知特性

第2章 子どもの樹木景観認知特性

第3章 青年期の若者が抱く都市景観イメージ特性

第4章 子ども・青年期の若者の地域協働への参加・参画について

第II編 高齢者の社会参加

第1章 高齢者の社会参加とコンピュータ・リテラシー

第2章 老人クラブの地域社会との連携・協働

第3章 高齢者の地域協働への参加・参画について

総括

3. 本論文の要約

序編では、地域協働や市民協働に関する理論的枠組、従来社会的サービスの受け手側であった子ども・青年期の若者・高齢者の地域協働への係わり方について考察した。

地域協働は継続性が重要であり、将来のまちづくりの担い手である子どもや青年期の若者の社会参加・協働の意識と能力を育てることの重要性を指摘した。また、高齢者自らが社会との係わりを高めることが求められることを指摘した。これらの課題について以下の第I編、第II編において研究を行った。

第I編では、景観まちづくりを事例として子どもと青年期の若者の地域協働活動への参画について研究を行った。

まず、第1章では、子どもの都市景観認知特性に着目して都市景観についての知識と景観認知能力について考察した。景観法では、住民の責務として良好な景観の形成に関する施策に協力を求めている。さらに、住民等による提案、住民等がより主体的に計画段階か

ら積極的に参加することを求めている。この住民には子どもも含まれているべきと考える。子どもが景観まちづくり活動に参画するためには、都市景観に対する知識や景観認知能力が求められる。都市景観は視覚に訴えられる対象ばかりではなく、都市の活動とその意味まで広範囲であるべきと考える。子どもは、このことをどのように理解しているのかを明らかにするため、子どもを対象に「私の好きな風景」絵画コンクールを行い、絵画対象の選択理由について書いた自由記述データをテキストマイニング手法により定量的に分析した。一般的には景観評価分析においては、分析者が用意した景観視対象を提示して定められた調査票に記入するが、本研究は子どもが自由に記述したテキストデータから子どもの景観に対する知識や景観認知能力を考察した。

結論として、子どもは景観まちづくり参画に求められる景観についての知識と景観認知能力を有していることを明らかにした。

良好な都市景観形成には視覚も重要であるが、地域の風土、文化、伝統、風景の保全が求められる。この点に関して、子どもは広く知られている事物と同時に日常生活を通して地域の祭り、花火、夜市等をも都市景観として認知している。また、建造物が本来持っている機能や意味も都市景観の構成要素として認知している。橋梁、鉄道・駅舎、道路等の人と人を繋ぐという視点は、学校や日常生活の中での学習が大きく影響をしている。特に、自由記述文にも多数登場する両親、祖父母の影響は大きい。その土地に生れ育ち、生活を営んできた祖父母を含め高齢者から次世代に地域の風土、文化、伝統、風景が継承されている。

子どもの成長に伴い景観に対する視点も子どもから青年期の若者、そして大人へと変化していく。身近な景観まちづくりに対する子どもの視点は重視すべきと考える。たとえば、学校周辺の街路の花壇整備や世話、清掃活動などその土地に根差した協働である。

子どもが景観まちづくりに参画して子どもの視点を反映することは、将来にわたって景観を守ろうという継続性が生まれることにもなる。

第2章では、子どもの樹木景観認知構造に着目して考察した。景観計画区域内において景観重要樹木を指定することができる。樹木の指定や選定には住民提案制度が示されている。候補樹木の選定に将来のまちづくりを担う子どもの視点を反映することは重要であると考えられる。子どもは、樹木を都市景観の視覚対象としてどのように認知しているのか、その特性を明らかにすることが主目的である。第1章と同様に「私の好きな樹木のある風景」絵画コンクールを行い、絵画の対象とした樹木を選んだ理由を書いた自由記述データにテキストマイニング手法を用いて子どもの樹木景観に対する知識や景観認知能力を考察した。

結論として、子どもが地域協働による樹木景観まちづくりに参加、参画することは現実的である。

子どもは、樹木景観について多様な視点場および視対象を指摘している。大人が指摘する樹木形や歴史等についての意見は少数であり、身近にある樹木に対する景観保全を指摘している。樹木景観認知は子どもの成長とともに変容していく。小学低学年の子どもは日

常的な行動範囲の中での樹木景観認知であり、高学年になると非日常的な行動範囲の中での樹木景観も認知している。中学生になると風景の中での樹木景観認知となっている。すなわち、日常的空間から非日常空間の中での樹木景観認知へ、さらに活動的空間から心理的空間での樹木景観認知へと変容している。

小学低学年は地区内での重要景観樹木選定に、高学年、中学生となれば、都市域での重要景観樹木選定に参加できる。

小中学校との連携、小中学生を対象としたワークショップ等を通して行政資料にも登録されていない新たな樹木発見も期待でき、景観まちづくりに子どもの視点を反映することはまちづくりの側面からも社会的意義は大きい。さらに、このことは子どもの景観学習にもつながり、なによりも地域協働に対する学習効果が大きい。

第3章では、故郷を離れて暮らす青年期の若者が抱く都市の景観イメージや美しい風景に注目して、どのような空間が親しみをもたれているのかについて考察した。都市は基本的には、働く（学ぶ）、憩う（遊ぶ）、住むの三つの目的に対応して活動している。この活動が都市景観に具現されている。本研究では青年期の若者として中国の大学生を対象に都市景観イメージ、美しい風景の視対象について記述を求め、その短文をテキストマイニングにより定量分析し、都市景観のイメージと美しい風景の認知構造を考察した。

結論として、青年期の若者は、都市の働く、憩う、住むに対応した都市の活動を都市景観として認知している。

故郷を離れて暮らす若者が抱く都市イメージは、暮らし始めて間もない時期には故郷と比較しながら形成されていき、新鮮な思いがイメージに表れている。特に、都市の経済的部分がイメージに鮮明に表れている。都市の働く面である。しかし、年数の経過とともに都市の憩う面がイメージされるようになる。その都市で生まれ育った若者たちには憩う面が強くイメージされている。

一方、住む面に関しては都市の環境については認識されているが、都市の歴史、文化、生活習慣が体现された都市景観に関するイメージは見られない。このことは、美しい風景についても同じである。

若者にとって美しい風景は、広く人々に知られた観光地、景勝地を意味している。

景観評価構造からは、他地域から移り住んで来た若者たちとその都市で生まれ育ってきた若者たちの間には非日常性と日常性とに違いが認められる。観光で、ビジネスでやってくる外来者にとっては非日常性が評価されている。娯楽街、景勝地等の夜景も都市の一つの景観であり、若者たちもそのことを認知している。

中国では近代化が急速に推し進められ、都市における文化、生活が一律となり、都市のアイデンティティが失われつつある。他地域から来た他者の視点を景観まちづくりに反映することは理にかなっている。

都市の歴史、文化、生活習慣が若者に認知されていないことを考慮すれば、高等教育機関での暮らししているまちの学習が必要である。これが、若者たちが地域協働に参加する動

機になる。

第4章では、第1～3章の結果を地域協働への参加・参画の視点から整理した。

第II編では、高齢者の社会参加について考察した。従来、高齢者は公助を受ける側であったが、高齢者の自助、共助が求められている。特に、ICT社会における高齢者の社会参加、地域協働の二点について考察した。

第1章では、高齢者のコンピュータ・リテラシーを支援するシステムの提案とその有用性について研究を行った。昨今、高齢者のICT活用は格段に高まってきているが、他の年齢層に比べると依然として低い。たとえ、コンピュータを利用できたとしても、常に新しい知識、技術を学習しなければならない。高齢者のコンピュータ・リテラシーを高めるため、名古屋大学、名古屋市、NPOが協働して、コンピュータ未経験者や初心者向けのインターネットソフト e-なもくん 2.0 を基本とした支援システムの提案とその有用性について考察した。

結論として、e-なもくん 2.0 を基本とした支援システムの有用性を示した。

大学、NPO、行政の3者による協働が高齢者のコンピュータ・リテラシー支援システム構築に大きな効果を発揮した。高齢者で組織されたNPOによるコンピュータの操作指導、大学の技術指導、生涯学習センターの高齢者の情報活用促進策等地域協働に基づいた活動であったことが大きな研究成果でもある。

高齢者のインターネット利用率は向上してきているが、SNSの利用率は低い。これからの高齢者は、SNSの活用等により、蓄積してきた知識・技術・経験をまちづくり等の社会参加に活かしていくことが想定される。本研究で提案したe-なもくん 2.0 はSNS活用支援システムに適用できる。それは、人的支援システムも含めて考えなければならない。特別な専門的な知識ではなく、インターネットやSNSについての知識や技量を有した高齢者自身が他者を支援することができる。さらに、高齢者によるコンピュータ・リテラシー支援の社会貢献が期待される。

第2章では、高齢者が地域と連携して社会貢献している実態と課題について調査、研究を行った。高齢者個人が社会貢献に参加することには躊躇するが、複数で活動するのであれば敷居は低くなる。そのため、地域で活動している老人クラブを対象にヒヤリング、年間活動記録などを詳細分析し、高齢者の社会活動について考察した。また、中国四国地区内の老人クラブが指摘する老人クラブ自体が抱える課題についても考察した。

結論として、地域に密着した老人クラブは、自助、共助に向けて多様な社会活動を実践していることを明らかにした。反面、多くの課題も明らかとなった。たとえば、クラブ会員数の減少、魅力あるクラブへの転換、クラブのICT化、クラブ活動を支える交通等である。

老人クラブの活動は、動的な活動と静的な活動、生活文化に関して能動的活動と受動的な活動、さらに学習に係る活動、慰労・慰安に係る活動に大別できる。都市部の老人クラブでは動的・能動的活動が特徴的であるが、都市部から離れた老人クラブは受動的活動に

特徴がある。

老人クラブの ICT 化は、仕事でコンピュータ使ってきた世代が、老人クラブの運営を担うことになれば、情報化は急激に進展し、老人クラブの地域協働は格段に進むことになる。

魅力ある老人クラブであることが、地域との協働を進めることになり、一過性ではなく、継続性のある活動になる。これに関しては他者も含めて改革を進めることが求められる。

次世代交流が積極的に行われている。特に、地方部で活発で、都市部においても望まれるところである。高齢者と子ども、さらに青年期の若者との交流が地域の文化、風習等が受け継がれていき、地域の持続性に寄与する。

クラブに加入していない高齢者が大多数であるが、彼らも文化活動、体育活動等には参加している。老人クラブが彼らとの協働についてリーダーシップを発揮すれば、高齢者の自助、共助活動は一層推進される。この点については、今後の課題である。

一方、交通手段に関しては、運転免許証返納が進みつつある現在、会員個人の責任で行き来している現状を検討する時期である。

第 3 章では、第 1, 2 章の結果を高齢者の地域協働への参加・参画の視点から整理した。

最後に、子ども・青年期の若者・高齢者間の協働について期待することをまとめる。

子どもの景観に対する知識や景観認知能力は祖父母の存在の大きいこと、また青年期の若者の知識や能力は児童期に形成された部分が大きいことを考えれば、高齢者が経験してきた地域の伝統、文化、慣習に関する豊富な知識や技術を子どもや青年期の若者に伝える場の一つが地域協働になる。

一方、ICT 社会における高齢者は SNS を活用し、自分が持つ知識、技術、経験を若い世代に伝えることにより地域貢献活動、さらに地域協働に参画することができる。すでに、老人クラブは地域において次世代交流も積極的に取り組んでいる。

これらのことを考慮すれば、社会的サービスの受け手が地域の課題を協働で解決を目指す活動も期待できる。景観まちづくり活動も子ども、青年期の若者、高齢者が加わることで暮らしやすいまちづくりに貢献することになる。

論文審査の結果

本論文は、地域協働、とりわけ子ども、青年期の若者、高齢者が地域協働にどのように係われるのか、現状と課題、その解決策について考察することを目的としている。

少子超高齢化、人口減少が急激に進展している現在、地域協働はまちづくりに不可欠なものとして捉えられている。行政だけでは、また地域住民だけでは解決できない地域課題について、相互が協力して解決に向けて活動する。こういった地域事情の中で子ども、青年期の若者、高齢者はどのような立ち位置を考えればよいのか。

研究では、地域協働の代表的な活動の一つである景観まちづくり活動を事例として子どもや青年期の若者の地域協働への参画について、また今日の ICT 社会において高齢者自らの自助、他者を思いやる共助の社会参加を事例として高齢者の地域協働への係わりについて考察している。

本研究の問題の所在は、従来社会的サービスを受ける側であった子ども、青年期の若者、高齢者が地域協働の担い手として期待されるのではないかというところにある。また、地域の伝統、文化、慣習等から考えれば、高齢者は伝承者であり、子どもや青年期の若者は継承者である。その土地で生まれ、育ち、生活を営んできた高齢者が持つ知識や経験を次世代に伝えていく場が地域協働でもある。このことによって、地域が持続可能な発展が叶えられるのではないか。こういった問題意識をもち、研究を行った。

本論文の構成は次のとおりである。第Ⅰ編では、子どもと青年期の若者の景観まちづくりへの参画について「子どもの都市景観認知特性」、「子どもの樹木景観認知特性」、「青年期の若者の都市景観イメージ特性」の視点から研究を行っている。第Ⅱ編では、ICT 社会における高齢者の社会参加について「地域協働による高齢者のコンピュータ・リテラシーの支援」、「高齢者の地域社会との連携・協働」の視点から研究を行っている。このように、少子超高齢化と人口減少が進展する社会における子ども、青年期の若者、高齢者の地域協働への係りに関する現状、課題、その解決策について考察することは、社会的な意義と独創性を評価できるとともに時宜にかなった研究である。

本研究の所産として、まず子どもや青年期の若者は、景観まちづくりへの参画に求められる知識や能力を有していることを明らかにした。彼らの知識や能力を景観まちづくり活動に反映できれば、良好な景観を保全しようという意識がたかまり、将来とも継続性のある地域協働になる。

次に、高齢者の社会参加は高齢者自らの自助、他者を思いやる共助につながる。今日の ICT 社会への参加において必要とされるコンピュータ・リテラシーの支援に関しては地域協働による支援システムの提案とその有用性を明らかにした。コンピュータ初心者にとって大変有効であることを示した。また、老人クラブは、地域協働の有力なメンバーであるが、大きな課題を抱えていることも明らかにし、その解決策についても考察している。

最後に子ども、青年期の若者、高齢者の三者間での協働について提言を行っている。地域の伝統、文化、慣習等の伝承・継承の場が地域協働である。また、高齢者の SNS 活用

により高齢者自身が持つ知識、技術、経験を若い世代に伝えることにより地域貢献活動、さらに地域協働に参画することができる。このように社会的サービスを受ける側が地域の課題を協働で解決することが期待される。子ども、青年期の若者、高齢者の協働によるまちづくりが、住みやすいまちづくりに貢献すると提言している。

以上を総合して、審査委員会委員一同は、本論文の独創的で新知見の多い研究成果が、博士（学術）学位論文として十分な内容と価値を有するものと認めた。

広島文化学園大学大学院報 (No. 4)
社会情報研究科

博士學位論文

論文の内容の要旨
及び論文審査の結果の要旨

第4号

平成31年(2019年)2月

発行 広島文化学園大学大学院社会情報研究科
〒731-4312 広島県安芸郡坂町平成ヶ浜 3-3-20

TEL : 082-884-1001

FAX : 082-884-0600

URL : <http://www.hbg.ac.jp>